

|   |   |
|---|---|
| <p><b>タイトル</b></p>                            | <p>アジアにおける中等教育レベルのろう学生の交流プログラム</p>  |
| <p><b>実践者／団体名</b></p>                         | <p>明晴学園中学部</p>  |
| <p><b>実施日・期間</b></p>                          | <p>2013年10月5日（土）～2013年10月8日（火）<br/>（事前準備・事後の取り組みも含めると2013年6月から11月まで）</p>  |
| <p><b>主な実施場所</b></p>                          | <p>フィリピン</p>  |
| <p><b>参加者及び人数</b></p>                         | <p>19名（明晴学園中学部生徒9名、外部参加者5名、引率教員5名）</p>  |
| <p><b>目標・ねらい</b></p>                          | <p>中等教育レベルを中心としたろうの青少年のネットワークづくりの中心となっているフィリピンのデラサール大学セント・ベニルデ校やバイブルろう学校などを訪問し、手話とろう文化で結ばれた国際的な共同体の中で海外の仲間と交流し連帯をはかる。さらに、国際的や視野をもって将来を考え、活躍できるような人間の育成を目指す。</p>   |
| <p><b>具体的な<br/>取り組み内容及び<br/>工夫・配慮した点等</b></p> | <p><b>1. はじめに</b></p> <p>本校は2008年に開校した、手話と日本語、ろう者の文化と聴者の文化というバイリンガル・バイカルチュラルろう教育（略してバイリンガルろう教育）を行っている、ろうの子どもたちのための学校である。日本では、このようなバイリンガルろう教育を行っている学校は本校以外にないため、海外のバイリンガルろう教育を行っている学校を参考にしたり、実際に視察や研修を行ったりしてきた。教職員だけでなく、子どもたちにとっても海外の聞こえない仲間たちに出会うことは、手話や文化の違いなどを体感し、国際的な視野をもって活躍できるような人間になるためにも大切なことであると考え、中学部以上のろうの生徒を対象に、2010年はカナダ、2013年はフィリピンとの海外交流を行った。いずれも日本財団の助成を得て行われた。今回は2013年に行ったフィリピンとの海外交流について報告する。</p> <p><b>2. 事前準備</b></p> <p>フィリピンや手話についての学習とともに、日本や日本文化についてきちんと説明できるようにするための学習や準備も行った。</p> <p><b>①フィリピンや手話・英語についての講義</b></p> <p>6月8日と9月10日の2回、フィリピンの事情に詳しいろう者（アジア経済研究所開発研究センターに勤務）に來校していただき、フィリピンの生活や文化、ろう者の様子などについての講演とフィリピン手話の研修を実施した。</p> <p>また、フィリピンのろう者は英語とアメリカ手話を使っているため、8月26日から30日までの5日間、アメリカ手話と英語の集中講義を行い、アメリカ手話での自己紹介の仕方や出入国カードの書き方などを学習した。</p> <p><b>②「旅のしおり」の作成（写真1）</b></p> |



フィリピンについて学んだことや調べたことをもとに、「旅のしおり」を作成した。日程・持ち物・注意点などに加えて、フィリピンの地理、食べ物、お金、名所などの情報も詳しく載せた。

### ③「明晴BOOK」の作成（写真2）

フィリピンで会った人たちに配布するために、明晴学園のこと、日本手話でのあいさつ、折り鶴の折り方など、日本語と英語で紹介したパンフレット「明晴BOOK」を作成した。

### ④日本についてのプレゼンテーション準備（写真3）

フィリピンの大学で日本について発表するため、パワーポイントの作成やプレゼンテーションの練習などを行った。内容は「明晴学園について」「日本手話とアメリカ手話の違い」「日本の文化（座禅、茶道、おじき、折り鶴、名所、食べ物、空手）」。生徒の得意なことを生かして、座禅や空手を実演したり、茶道やおじきの仕方を説明したり、折り鶴を作ってみせたりして、大学生たちに好評であった。

### 3. フィリピン交流の様子（写真4）

本プログラムの4日間のスケジュールは下記の通りである。

<1日目>夜に到着

<2日目>教会礼拝やマニラの史跡などの見学、フィリピンろう中学生と交流ランチ、ろう者の職員が働いている店でディナー

<3日目>バイブルろう学校、ろう者も学んでいる夜間高校の見学と交流

<4日目>デラサール大学の見学、日本についてプレゼンテーション

実際にフィリピンを訪れて、生徒たちは多くのことを知った。スペイン統治時代にフィリピンの人々の言葉や文化が奪われたこと、ホセ・リサルという今も国民から愛される英雄がいたこと、多くの島々それぞれに言語があり、文化があることなどである。そして、デ・ラ・サール大学にはろう学部があり、大勢のろう者が学んでいるということ、ろう者と聴者が共に学ぶ夜間高校もあるということなどである。日本にはそのような大学や夜間学校はなく、生徒たちにとっては驚きであった。

デラサール大学のろうの学生たちが生徒たちのために1人ずつ付き添い、一緒に観光したり昼食に付き合ったりしてくれたため、内容の濃い交流ができた。同じ聞こえない立場であることから、共通する思いや経験があり、それらがいつそお互いの絆を深めることができた。夜間高校で学んでいるろうの生徒や教員との意見交換の場で、生徒たちが質問内容を理解して答えることができたことや、大学で日本文化についての無事にプレゼンテーションを行うことができたことは、生徒たちにとって大きな自信となった。

帰国後、生徒たちは次のように感想を述べている。

「たくさん交流できて楽しかった」「フィリピンの手話とアメリカ手話は違うし、文化も違う」「フィリピンの大学や高校では、ろう者と聴者が一緒にいた。夜間高校では1つの教室にろう者と聴者が一緒に授業を受けていて驚いた」「高校を卒業したら、デ・ラ・サール大学に行きたい」

|   |   |
|---|---|
|   | <p>外部参加者からも、本校の生徒たちとフィリピンのろう者との交流について次のように述べていた。「感動したことは、お互いの言語（日本手話・フィリピン手話）のバリアがあったにも関わらず、積極的にお互いに相手のことをよりよく知ろうと楽しく努力していました。確かにデラサール大学生たちと明晴学園の生徒たちの間には先輩・後輩の間に親しいつながりができました。ろう者であることに基づいて、相互の理解ができたのではないかと思います。」</p> <p><b>4. 帰国後の取り組み</b></p> <p><b>①文化祭での発表（写真5）</b></p> <p>フィリピン交流から帰国後、約1カ月後の11月15～16日に本校の文化祭があり、生徒たちはフィリピンについて発表することに決めた。</p> <p>フィリピン独立運動の父として名高い「ホセ・リサル」は、どんな抑圧にあってもフィリピンの文化や言語を守ろうとした人物であるが、ろう教育でも長い間、手話が認められなかった歴史があり、自分たちの言語を守りたいという思いは、国の違いを超えて共通するものであった。生徒たちはリサルについて詳しく調べ、リサルへの尊敬を劇に込めて熱演した。また、リサルが作詩した「サ・アキン・マガ・カバタ（同胞である青年へ）」は、言語や文化、民族に対する熱い意図が込められた難しいものであったが、どう手話で表現するか、生徒たちで考え、工夫した。</p> <p>展示発表では、フィリピンの生活や文化などの紹介、フィリピン交流の様子のビデオ放映、フィリピン手話の教室などを行った。</p> <p><b>②募金活動（写真6）</b></p> <p>文化祭に向けて準備していた11月8日、フィリピンが台風で甚大なる被災を受けた。そのことを知った生徒たちは、研修で交わった仲間たちへ少しでも支援したいと思い、文化祭で募金活動を行うことを決めた。手作りで募金箱を作り、千神祭で募金を呼びかけた結果、総額44,520円が集まり、日本赤十字社に寄付することができた。</p> |
| <p><b>教材・資料</b></p>                     | <p>※添付した資料をご覧ください。</p>  |
| <p><b>成果</b></p>                        | <p>4日間という短い期間であったが、フィリピンという異文化を実際に目で見て触れて感じて、「世の中にはまだまだ知らないことがたくさんある。世界は本当に広いのだ」ということを知ることができた。この体験は帰国後も、フィリピンの歴史や文化を調べたり、リサルの生涯を演劇にしたりと、生徒たちに大きな影響を与えた。また、フィリピンが台風による被災を受けたとき、募金活動で支援したいと活動するなど、他の国のことを思い、行動することができた。</p>  |
| <p><b>発展<br/>（この取り組み<br/>の生かし方）</b></p> | <p>手話とろう文化によるバイリンガルろう教育を受けている生徒たちにとって、海外での交流や研修は、様々な言語や文化があることを知るいい機会であり、多文化共生への第一歩となる。生徒たちが国際的な視野を広めながら、様々な人たちの言語と文化を尊重し、ともに共生しあえる多文化共生社会の担い手となっていけるように、今後とも中学部にいる間に、海外交流の機会を設けていきたい。</p>  |

管理者記入欄：

参考資料

写真1 「旅のしおり」



写真2 「明晴BOOK」

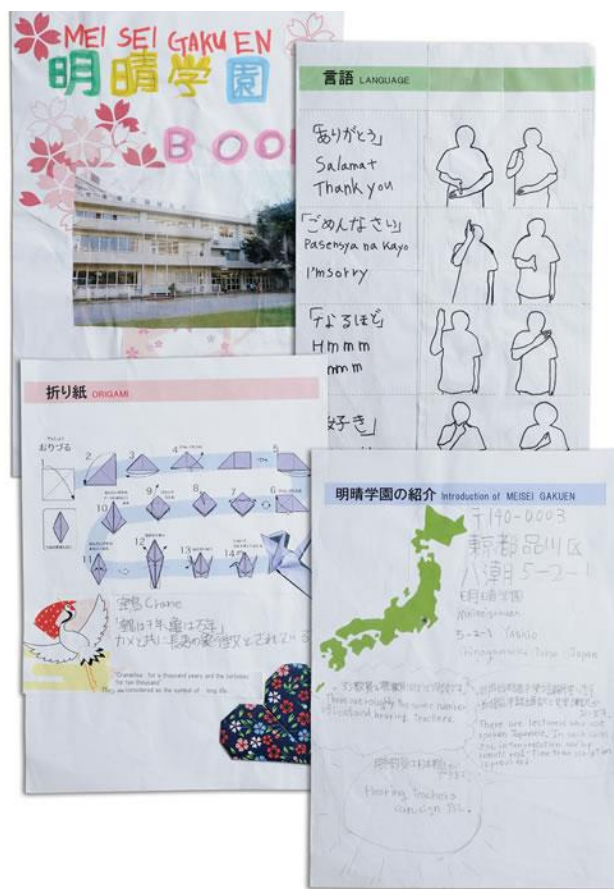


写真3 日本についてのプレゼンテーションのために作ったパワーポイント



管理者記入欄：

写真4 フィリピン交流の様子



写真5 文化祭での舞台発表と展示発表



写真6 文化祭での募金活動と日本赤十字社への振込

